

生活科がキャリア教育に果たす役割についての研究

小学校第1学年の実践に着目して

藤上 真弓・志賀 直美^{*1}

A Study of the Role of Living Environment Studies in Career Education:
Focusing on the practice in the first grade of elementary school

FUJIKAMI Mayumi, SHIGA Naomi^{*1}

(Received August 3, 2023)

キーワード：キャリア教育、生活科、基礎的・汎用的能力、自分の成長、生活や出来事の伝え合い

はじめに

中央教育審議会（2011）による「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」において、「キャリアが子ども・若者の発達の段階やその発達課題の達成と深く関わりながら段階を追って発達していくことを踏まえ、幼児期の教育から高等教育に至るまで体系的に進めることが必要である」（p. 19）と述べられており、幼児期から子どもたちのキャリア発達を促す教育を体系的に推進する重要性について示された。キャリア教育は、「一人一人の社会的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」（中央教育審議会、2011、p. 16）と定義付けられている。「キャリア発達」とは、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」（中央教育審議会、2011、p. 17）というように、子どもが育っていく過程に着目して定義付けられていることから、どの校種においても、子どもたちの学びと育ちをとぎれることなく保障し続ける必要があることが分かる。

生活科は、子どもたち一人一人の思いや願いに寄り添いながらねらいを達成していく教科であり、子どもたちは自分の思いや願いを原動力として、対象や仲間、そして自分と向き合い、生活をより豊かにしていくための資質・能力を身に付けていっており、一人一人のキャリア発達を促すことを意図して、学びを展開していると言える。

しかし、中央教育審議会答申（2011）によると、「初等中等教育については、例えば、キャリア教育の実践にあたり、総合的な学習の時間や特別活動等を活用している学校が多いが、体系的な指針が十分に示されず、教科・科目等の中でも実践する時間が十分に確保されていない場合も多いことからそれぞれの活動が断片的にとどまって」（p. 32）いるという課題が挙げられている。このことから、教科学習とキャリア教育の関係性を、今一度とらえ直していく必要があると考える。

本研究においては、子どもたちが小学校低学年で学び、幼保小の接続期に重要な役割を果たしていく生活科は、キャリア教育という視点からとらえると、どのような役割を果たしていかなければならないのか、第1学年における生活科の実践を通して、見つめていきたい。

1. 小学校低学年におけるキャリア教育と生活科

1-1 小学校低学年におけるキャリア教育

ここでは、小学校低学年におけるキャリア教育の在り方について整理していく。

文部科学省（2011）による『小学校キャリア教育の手引き<改訂版>』によると、表1のように、小学校のキャリア教育で目指すことについて示されている。

*1 山口大学教育学部附属山口小学校

表1 小学校のキャリア教育で目指すこと

低学年	好きなこといっぱい できることいっぱい 学校って楽しいな	自分の好きなこと、得意なこと、できることを増やし、様々な活動への興味・関心を高めながら、意欲と自信を持って活動できるようにする
中学年	自分と友だちと みんないっしょに	友達のよさを認め、協力して活動する中で、自分の持ち味や役割を自覚することができるようにする
高学年	挑戦する やりぬく 夢・希望を広げる	苦手なことや初めて経験することに失敗を恐れず取り組み、そのことが集団の中で役立つ喜びや自分への自信につながるようにする

(文部科学省、2011、p. 111、p. 127、p. 147 をもとに抜粋整理)

2023年に『小学校キャリア教育の手引き』は『小学校学習指導要領(平成29年告示)』に準拠して出版されたが、目指すことは2011年版の『小学校キャリア教育の手引き<改訂版>』で示された各学年段階における目標(表1参照)やキャリア教育を実践していくためのポイント、示されているキャリア発達課題に大きな変更は見られなかった。2023年度版の『小学校キャリア教育の手引き』には、表1の一番右の欄にあるねらいと全く同じ文言で、「キャリア発達に即した主たるねらいの例」(文部科学省、2023、p. 64)として示されている。加えて、小学校低学年におけるキャリア発達課題の主たる課題は、「学校生活への適応」(文部科学省、2023、p. 64)、小学校低学年におけるキャリア発達段階を達成する上で大切な視点は、「小学校に適応する」「身の回りの事象への関心を高める」「自分の好きなことを見つけてのびのびと活動する」(文部科学省、2023、p. 94)という3つが示されている。これも、2011年版の『小学校キャリア教育の手引き<改訂版>』において、「低学年のキャリア発達課題」(文部科学省、2011、p. 111)に示されているものと同じで変更はされていない。

これらのことから、低学年期のキャリア教育では、義務教育スタート時の子どもたちが、学校は、自分らしさを発揮しながら、好きなことや得意なこと、できることを増やしていくことができる楽しい場所であるというとらえをもつことができるような学びを提供することが求められ続けていることが分かる。そのような学びを通して、子どもたちが、自己肯定感を高めながら、さらに学びに向かっていく姿を具現化することが重要である。

表2は、キャリア教育において身に付ける基礎的・汎用的能力の定義と、2023年度版の『小学校キャリア教育の手引き』小学校低学年において身に付けたい基礎的・汎用的な能力の例を整理したものである。

表2 基礎的・汎用的能力の定義と小学校低学年において身に付けたい基礎的・汎用的能力の例

基礎的・汎用的能力	基礎的・汎用的能力の定義	低学年において身に付けたい基礎的・汎用的能力の例
人間関係形成・社会形成能力	多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力	<ul style="list-style-type: none"> ・あいさつや返事をする ・「ありがとう」や「ごめんなさい」が言える ・友達の気持ちを考える ・みんな仲よく学習したり遊んだりする ・自分の生活を支えている身の回りの人に感謝する ・同じ考えの友達と話し合う ・友達のよいアイデアに気付く ・身近な人々に関心をもち、積極的に関わる
自己理解・自己管理能力	自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた公的的理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力	<ul style="list-style-type: none"> ・決められた時間や約束を守る ・してよいことと悪いことがあることが分かる ・自分の好きなもの、大切なものをもつ ・自分の気持ちや意見を伝える ・係活動や家での仕事を通して、自分の役割の大切さが分かる ・自分ができることを知る

課題解決能力	仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力	<ul style="list-style-type: none"> ・作業の準備や片付けをする ・めあてや計画を立てて活動する ・分からないことがあったら自分から質問する ・当番活動を通して、働くことへの意識をもつ ・当番活動を通して、働くことへの意識をもつ ・みんなで楽しい学校生活を作るために、話合いの仕方を知る
キャリアプランニング能力	「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリア形成していく力	<ul style="list-style-type: none"> ・係や当番の仕事に取り組み、その大切さが分かる ・身近で働く人の様子が分かり、興味・関心をもつ ・学んだことを生かすことができる ・自分の成長に気付くことができる

(文部科学省、2023、p. 19、p. 20、pp. 94-95 から抜粋整理)

1-2 小学校低学年におけるキャリア教育と生活科

ここでは、小学校低学年のキャリア教育と生活科の関係についてとらえていきたい。

表1の低学年で目指す子どもの姿を見ると、子どもたちの「安心」「成長」「自立」(文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター、2015、p. 2)を保障し、「小学校に入学した子供が、幼稚園・保育所・認定こども園などの遊びや生活を通じた学びと育ちを基盤として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していく」(文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター、2015、p. 2)というスタートカリキュラムのねらいとほぼ同じ意味合いのねらいとなっている。そのスタートカリキュラム中心にあるのが生活科である。

中央教育審議会答申(2011)において、「キャリア発達は、個々の子ども・若者でそれぞれ異なるため、一人一人のキャリア発達を促すよう、きめ細かく支えていくことが必要になる」(p. 28)と述べられている。生活科については、「何を教えるかというより、何を育てるか。何をさせるかというより、何をしたいかと思ひ、願っているか。何ができたかというより、何をしようとしたか。これまではどうだったかというより、これからどうなるか。生活科は子供の側に立ち、一人一人の子供のよさや可能性をのばす教科です。」(文部省、1993、前書き)と示されているように、平成元年『小学校学習指導要領』において創設されて以来、子ども一人一人の思いや願いに寄り添いながら、子どもたちが対象や仲間、自分と向き合っていく過程を大切にしながら学びを展開し、子どもたちの自立の基礎を培っていくという教科としての目標を達成する授業が積み重ねられてきている。つまり、子ども一人一人のキャリア発達を支えていく教科なのである。

三村(2004)は、教科や領域とキャリア教育の関係について述べているが、生活科とキャリア教育の関係について、平成10年度改訂の『学習指導要領』における生活科における目標と関連付け、表3のように整理している。

表3 平成10年度改訂の『学習指導要領』における生活科の目標と基礎的・汎用的能力の関係

生活科の目標	関連する基礎的・汎用的能力
具体的な活動や体験を通して	様々な役割の体験
自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち	コミュニケーションや相互理解、人や生物への興味関心
自分自身や自分の生活について考えさせるとともに	自己理解、興味や関心、学習と生活との関連付け
その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う	人間関係形成、情報活用、将来設計、意思決定など

(p. 27 の図から抜粋)

『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説生活編』で示された生活科の目標（表 4 参照）を、キャリア教育で育成していく「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」（文部科学省、2023、p. 19）の四つの基礎的・汎用能力の具体的内容（表 2 参照）に照らし合わせると、生活科において育成する 3 つの資質・能力のどれにも関わってくると考える。

表 4 平成 29 年告示の『学習指導要領』における生活科の目標

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
(1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。
(2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。
(3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

（目標は、文部科学省、2018、p. 8 から抜粋）

具体的にとらえていくと、表 2 の基礎的・汎用的能力の例において、生活科独自の学びに関わるものを抜粋すると、主に、表 5 のようになると考える。表 2 から抜粋していない基礎的・汎用的能力も、他の教科と同様に生活科の学びの中で育成したり、発揮したりするものであると考える。生活科においても、働く人々に関わっていく単元もあり、それらの単元を通して、低学年なりの職業に対する見方・考え方を形成していくが、表 1 や表 2 を見ても分かるように、キャリア教育は単に職業における見方・考え方だけに特化した教育を行うわけではない。

表 5 生活科で育成する主な基礎的・汎用的能力

「人間関係形成・社会形成能力」	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の生活を支えている身の回りの人に感謝する ・身近な人々に関心を持ち、積極的に関わる
「自己理解・自己管理能力」	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の好きなもの、大切なものをもつ ・家での仕事を通して、自分の役割の大切さが分かる ・自分ができることを知る
「課題解決能力」	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで楽しい学校生活を作るために、話し合いの仕方を知る
「キャリアプランニング能力」	<ul style="list-style-type: none"> ・身近で働く人の様子が分かり、興味・関心をもつ ・学んだことを生かすことができる ・自分の成長に気付くことができる

2. 第 1 学年 生活科 単元「すきをもっとすきへ」（授業者 志賀直美）について

ここでは、生活科において授業実践した「すきをもっとすきへ」の単元の概要について述べる。

2-1 本単元で子どもが働かせる生活科の見方・考え方

生活科において子どもが働かせる見方・考え方は、「身近な生活に関わる見方・考え方」（文部科学省、2018、p. 10）であり、「身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとする事である」（文部科学省、2018、pp. 10-11）と明記されている。

さらに、「身近な生活に関わる見方」は、「身近な生活を捉える視点」（文部科学省、2018、p. 11）、「自分との関わりによって対象を捉える視点」（久野、2017、p. 61）、「身近な生活に関わる考え方」は、「自分の生活において思いや願いを実現していくという学習過程にあり、自分自身の生活や自分の生活について考えていくこと」（文部科学省、2018、p. 11）、「物事を判断する際の思考の方向性」（久野、2017、p. 61）であると説明されている。

本単元で子どもが働かせる生活科における見方・考え方は、具体的には「自分との関わりで対象をとらえる視点（自分の「すき」を自覚すること）」（志賀、2023、p. 39）として単元や授業を構成している。

2-2 単元について

2-2-1 単元設定の意図

塾や習い事と忙しい子どもたちであるが、休み時間に、虫取りや鬼ごっこ、読書やお絵描き等をしながら楽しく過ごしており、そういった時間は、子どもたちにとってほっとする一時でもある。このような子どもたちが、自分の楽しい時間の過ごし方を活かした店を開く学習に取り組むことは、自分の好きなことを見つけ、自らの生活を豊かにしていくとともに、予測困難な時代の中で、自ら心の支えになっていくだろうと考え、単元を設定した。

2-2-2 単元のねらい

本単元は、「自分の楽しい時間の過ごし方を活かした店を仲間と協力して開くことをとおして、自分の好きなことを追究していく学習である。子どもたちは、店を開くことに向けて、自分の楽しい時間を紹介するために、楽しいことを存分にしてみたり、紹介するための方法を試行錯誤したりしていくであろう」（志賀、2023、p. 39）と考えた。「その際、自分の『すき』を自覚することを大切にすることで、自分の好きなことを意識して、自分の楽しい時間を過ごそうとしたり、より楽しく過ごせるように工夫したりする姿を生み出すことができる」（志賀、2023、p. 39）と考えた。

2-2-3 単元における支援について

主に表6にある3つの支援を行い、本単元で目指す子どもの姿の具現化を図っていった。

表6 単元における支援

<p>①「ほっとする」「すっきりする」「わくわくする」という3つの視点で、ふだんの自分の過ごし方を見つめ直す活動を設定する。そうすることで、自分の楽しい時間の過ごし方を見つけることができるようにする。</p> <p>②店の準備をしたり、店を開いたりした後、自分の「お気に入り度」とその理由を振り返るように促す。そうすることで、自分の「すき」を自覚することができるようにする。</p> <p>③客になる対象を変えながら、繰り返し店を開く活動を設定する。そうすることで、自分の「すき」を自覚して、より楽しくなるように工夫することができるようにする。</p>
--

(志賀、2023、p. 39)

2-3 目標について

本単元で取り扱う内容は、内容(8)「生活や出来事の伝え合い」、内容(9)「自分の成長」である。本単元の目標の1つめは、「自分の楽しい時間の過ごし方を活かした店を活かした店を仲間と協力して開くことをとおして、自分の『すき』を自覚し、より楽しくなるように工夫することができるようにする。」(志賀、2023、p. 39)であり、2つめは、「学習を通して得られた自信をもとに、自分の楽しい時間の過ごし方を活かしながら自分の好きなことを見つけ、自らの生活を豊かにしていくことができるようにする。」(志賀、2023、p. 39)である。

2-4 指導計画

本単元の指導計画は、「第一次 自分の楽しい時間の過ごし方を見つける(2時間)」「第二次 自分の楽しい時間の過ごし方を活かした店を開く(11時間)」「第三次 自分に手紙を書き、単元全体の学習を振り返る(1時間)」の全14時間で計画している。

2-5 本時について

2-5-1 本時のねらい

本時のねらいは、「自分の好きなことを伝え合う活動をおして、自分の『すき』を自覚し、園児に向けて開く店がより楽しくなるように工夫することができる」(志賀、2023、p. 40)である。

2-5-2 子どもたちの「すき」の対象

子どもたちは、「野球、サッカー、ドッジボール、一輪車、怖い話、本、石、宝石、アクセサリ、電車、歴史、工作、折紙、ゲームのキャラクター、怪獣、へび、虫、犬」であり、多様なもの・こと・生き物等を、「すき」の対象としていた。

2-5-3 学習過程における教師の手立て

ここでは、各学習過程における教師が行った手立てについて述べる。

①前回の様子を振り返り、よいお店になった理由を話し合う

学習活動1においては、「どうして素敵なお店（お気に入り度が5）になったのかな。」と問うことで、自分の「すき」を自覚して、「店」が楽しくなるように工夫したことが捉えられるようにしていった。

②好きなことを伝え合う

学習活動2においては、自分の好きなことを伝え合う場を設定することで、自分の「すき」をより具体的に自覚することができるようにした。

③紹介の方法についてグループで話し合い、準備する

学習活動3においては、附属幼稚園の星組にお店を開く場を設定するためにグループで話し合う場を設定することで、自分の「すき」を自覚して、より楽しくなるように工夫することができるようにした。



図1 グループでの話し合いの様子

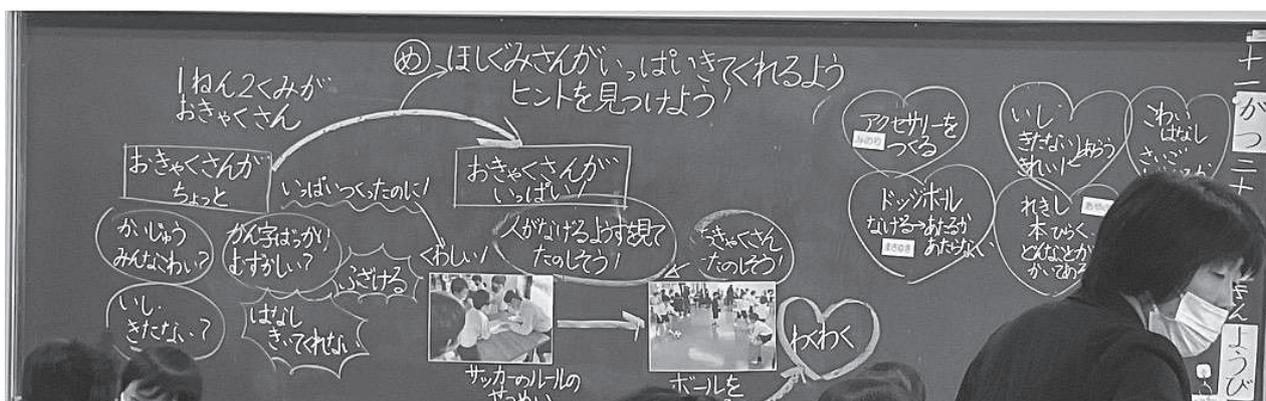


図2 本時の板書

2-5-4 本時の以降の子どもの学び

表7は、本時を通して見いだした「お店がより楽しくなる工夫」をもとに、子どもたちが園児にお店を開いている様子である。

表7 子どもたちが園児に店を開いている様子

こうさくやさん	ほうせきやさん	おりがみやさん

*ビブスを着用しているのが園児

図3と図4は、園児との交流の後の子どもの振り返りカードである。

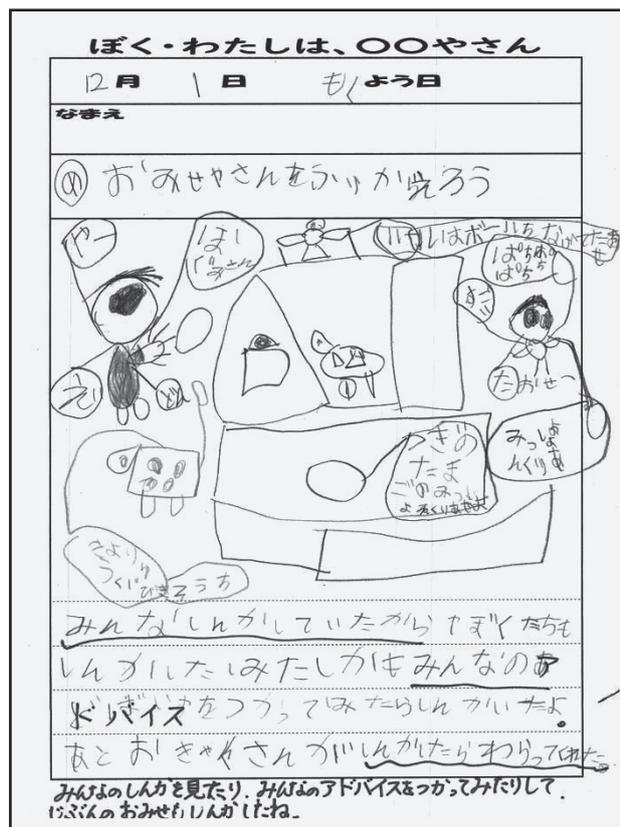


図3 クラスメイトのアドバイスをもとに「店」を改善した効果を園児の反応から自覚していった子どもの振り返りカード

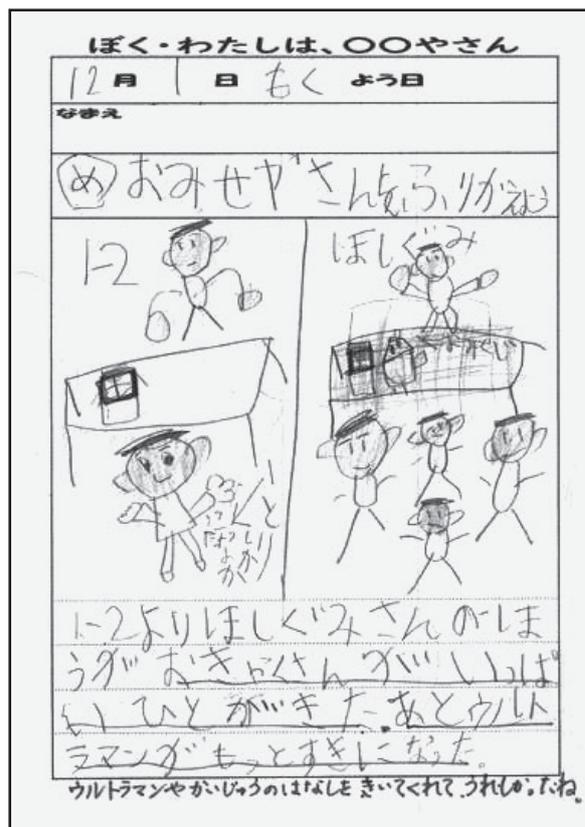


図4 「店」を改善した効果を集まる園児の数から自覚するとともに、「店」を改善することにより、自分の「好き」なキャラクターへの思いが強まった子どもの振り返りカード

3. キャリア教育という視点からみた本実践の特色や価値

本実践の特色や価値は、自分の成長に関する内容を取り扱う単元の新たな可能性を広げ、現場実践への提案性が高いところである。

まず、小学校第1学年において「自分の成長」に関する単元で、子ども一人一人が、自分の「好き」を見つめることの意味や価値について述べる。次に、一人一人の「好き」という情意面に関する内容を協働的に学ぶ意味や価値について述べる。

3-1 「自分の成長」に関する単元で子ども一人一人が自分の「好き」を見つめることの意味

本実践の特色や価値は、小学校第1学年の「自分の成長」を取り扱う単元において、子ども一人一人の好きなもの・ことに焦点化して授業を展開しているところである。

小学校低学年に目指されていることは、表1にも示したように、「好きなこといっぱい できることいっぱい 学校って楽しいな」ということを子どもたちが実感していくことである。「内容(9)自分の成長」に関わる単元は、自分の好きなこと、できるようになったことの自覚を促し、自分の成長を実感させることをねらうため、子どもたちの今後のキャリア形成に重要な役割を果たしていく。

表8は、三社の教科用図書の第1学年末の「自分の成長」に関する単元の中に、「①好きなこと」「②得意なこと」「③できること・できるようになったこと」「④楽しいこと・楽しかったこと」など、低学年のキャリア教育のねらいに関連する表現がどのくらい用いられているのかを整理したものである。また、生活科は学びの過程を大切にしているため、「⑤がんばった・がんばっていること」も付加して整理した。具体的には、主に「好き」は「～が好き」「おすすめの～」、「得意」は「～がとくい」、「できること・できる

ようになったこと」は「～ができるようになった」「～ができた」、「がんばったこと・がんばっていること」は「～をがんばったよ」「今も～している」、「楽しいこと・楽しかったこと」は「～はおもしろい」「～は楽しかった」「学校に行くのが楽しみになる」等を、教科用図書に示されているめあてやタイトル、教師や独自のキャラクターからの問いかけ、子どもの言葉、掲載されている表現物や板書の文字などから抜粋して整理した。

表 8 教科用図書の小学校第 1 学年末の「自分の成長」に関する単元に掲載されている
低学年期のキャリア教育にのねらいに関連する表現の数

教科用図書の出版社	東京書籍	新興出版社啓林館	光村図書	合計
単元名	もう すぐ 2ねんせい	もう すぐ 2年生	もう すぐ みんな 2年生	
①好きなこと	3	0	0	3
②得意なこと	0	1	2	3
③できること・ できるようになったこと	7	9	3	19
④楽しいこと・楽しかったこと	9	9	5	23
⑤がんばったこと・ がんばっていること	1	1	2	4

([東京書籍、2020、pp.105-114] [新興出版啓林館、2020、pp.108-117、光村図書、2020、pp124-135] をもとに整理)

現場実践では、「自分の成長」に関する単元において、「できること・できるようになったこと」に着目されて授業展開がなされている場合が多い。表 8 の三社の教科用図書を見ても、「③できること・できるようになったこと」に関する表現が 2 番目に多く見られた。「できること・できるようになった」ことを見つめることは、子どもが成長を実感しやすく、自分の成長を支えている存在に着目していったり、「今度は私たちが 2 年生になるのだから、来年の 1 年生になるみんなのために何かできることはないかな？」というように、自分も誰かを支える存在になり得ることを意識し、その思いをもとに何らかの実行につなげたりするような流れになることが多い。分析した三社の教科用図書においても、次年度に入学してくる 1 年生のために自分たちにできることを行ったり、小学校に招待したりする単元計画となっていた。もちろん、「できるようになったこと」を自覚することは、生活科の成長に関わる単元としても、キャリア教育の視点からとらえた授業としても、目指す姿につながる学びであり、適切な単元計画であると言える。

しかし、生活科は、自分の世界を充実させていく教科であり、本研究で取り扱った単元のような自分の「すき」の自覚を促すことに力点を置いた授業も必要であると考え。「すき」なもの・こと等に没頭する活動、没頭できるもの・ことなどを見つけていく活動、自分が没頭するもの・ことを自覚する活動は、低学年期のキャリア教育で育成する基礎的・汎用的能力の「自己理解・自己管理能力」の中でも「自分の好きなもの、大切なものをもつ」という姿の具現化に向かう学びとなる。もちろん「自分のできることを知る」も、低学年期のキャリア教育で育成する基礎的・汎用的能力の「自己理解・自己管理能力」の例として挙げられており、「すきなこと」「できること」その双方の自覚が求められるため、「できる」という能力に直結していくものの自覚だけでなく、「すき」という人を突き動かす情意面を大切にいく学びを提供していく必要があると考える。自分の「すき」をとらえ、それと自分との関係性をとらえていく学びは、今後、自分の核となるものや見方・考え方などを見つめる素地となっていく。寿山 (2012) は、シャインが提唱した「キャリアンカー」の概念を、「個人のキャリアのあり方を導き、方向付ける錨。キャリアの諸決定を組織化し、決定する自己概念」(p. 9) と紹介しているが、本授業は、人生の舵取りのよりどころとなるものの基盤を育成する取組となっている。

表 8 を見ると、「楽しいこと・楽しかったこと」に関する表現が 1 番多く掲載されていたことが分かる。表 1 にもあるキャッチコピー的に示された小学校低学年のキャリア教育で目指すことは、『好きなこと』『できること』の自覚により、学校という場所が楽しい場所になっていく」という構成になっているが、「楽しい」と感じるもの、「～だから楽しい」というように「楽しさ」の質の具体を自覚していくことは、自分自身への気付きの質が高まっていくことにもつながると考える。これが、次の節で述べる本研究で取り扱った実践の 2 つめの意味や価値へとつながっていく。

3-2 一人一人のキャリア形成と協働的な学び

ここでは、一人一人の「すき」という情意面に関する内容を協働的に学ぶ意味や価値について述べる。

本実践の特色や価値の2つめは、自分の「すき」を他者と共有し、広げることまでねらっているところである。自分の「すき」なものの自覚に留まらず、その理由の自覚を促すことをねらう単元にし、気付きの質をより高める深い学びを提供している。

本単元で子どもが働かせる各教科等の見方・考え方は、自分との関わりで対象をとらえる視点（自分の「すき」を自覚すること）であり、「対象」とは「自分の『すき』」と想定している。しかし、その「すき」の自覚を一人一人に促すために、クラスメイトや伝える相手とどのように協働的に学ぶ場を設定するのか、そこにおける教師の手立てについて吟味しておかねば、深い関わり合いのある協働とはならない場合が多い。なぜなら、このような授業は「すき」を一方向的に伝える姿を生み出しがちで、双方向的に何かを吟味し合う授業になりにくいからである。

本単元では自分の好みを学習対象にしており、自身の世界をより豊かに、充実させていくことをねらう単元の中で、内容（8）でもある「生活や出来事の伝え合い」を行うと、「伝える」に留まってしまうことも多いのである。また、「伝え合い」となっても他者が大切にしていること、他者の興味・関心の核となるものに迫ったり、それを体験したりするというところにまでをねらうことは難しいのである。自分の「すき」を自覚、究めることと、そして、それをしながら他者を巻き込み、さらに自分の「すき」を実感するという単元デザインは、教師の適切な問いかけや手立てがなければうまく学びが展開されない。どの授業でも適切な手立てが必要なのは当然なことであるが、「すき」は個々の問題であるため、それを協働的に学んでいく場面を本質的にしていくには、適切な教師のしかけが必要になる。

そのような場を生み出すための教材研究は、自分の「すき」なものを伝える側の視点から捉えると、「憧れの人、こだわっている食べ物、大好きでたまらないもの・こと等の『すき』なもの・ことについて、誰かに熱く語りたくなる理由は何か。どんな時に語りたくなるか。」、他者の「すき」なものを伝えられる側の視点から捉えると、「誰かから『すき』なもの・ことについて熱く語られた時に、どのような気持ちになるか。」等というような伝える側・伝えられる側双方の情意面を踏まえていく必要がある。他者を巻き込むということは、自分だけが「すき」を追求し楽しむわけにはいかない。自分の「すき」を人に伝えるということに向かうには、「この楽しさを誰かと共有したい」「〇〇仲間を見つけない」「〇〇のことを知ってほしい」「自分の好きな〇〇がもっと有名になってほしい」等という思いがあるはずである。自分の「すき」は自分にとって大切なものだから、自分だけのものにしておきたいという思いも生まれてくるかもしれない。この思いは、「他者を巻き込みたい」と思うかどうかということにも関係してくることである。

このように、「すき」は個々の情意に関係するため、自分にとって「すてきなお店」、つまり、自分にとって「お気に入り度」の高い店を提供することと、そのお店に来る子どもの「お気に入り度」は一致するとは限らない。「店」に来る側は自分の興味・関心で「店」を選択するので、自分の「店」には誰も来ないということも生まれてくる。自分の「お気に入り度」が高いというだけでは、「店」は成り立たないのである。

「店」を提供する側になれば、人が集まって楽しそうに活動している「店」を見れば、自分たちだけが楽しんでいる「店」、人を楽しませようと思って開いている「店」にあまり人が来てくれないという現実や他者の「お気に入り度」の低さに対してがっかりしたり、淋しい思いを抱いたりする。その感情を抱いた後に、「もう『店』をやらない」となるか、「どうして私たちのところに人が集まってこないのだろうか。もっと人を集めたい。」「〇さんのところの『店』はみんな楽しそうに参加していた。なぜだろう。」となるか、それは、教師が設定する協働的な学びの場における手立てにかかっている。

「店」を成り立たせるためには、「すき」なもの・ことにある本質に迫っていかざるを得ない。本単元の本時や本時以降の学びは、なぜ、自分がそれを「すき」なのかということの自覚を促していく単元になっている。例えば、自分の「お気に入り度」と他者が自分の店に対する「お気に入り度」の違いのズレを生かし、他者に自分のお気に入り度を気に入ってもらったり、興味・関心をもってもらったりする方法に目が向くようにしている。自分の「すき」、つまり「自分の世界に他者を誘いたい」と思うには、「自分の世界」と「他者の世界」との折り合いが必要になってくる。他者の興味・関心も知らなければ、「自分の世界」に誘うことは難しい。また、自分がその「すき」なもの・ことに対して、「～を見ているとワクワクする」「サッカーのシュートが決まった時に一番気持ちが盛り上がる」等というように、どういったところ魅力を感じているのか、自分自身への気付きの質を高めていかねば、その魅力を実感してもらうためにはどういった店を設営したらよいの

かということを見いだすことができない。

本時の教師の手立てのポイントは、「他者が自分の『すき』に向かうようにしていくために、どのような事例を取り上げ、一人の子どもが感じたことを、他の一人一人の子どもの自分の『すき』に向かわせていくのか」ということであった。図3と図4の子どもの振り返りカードを見ても分かるように、「よいお店」になるために協働的に学び合った子どもたちは、自分や自分たちの「店」の改善ポイントを見だし、園児に喜んでもらうことによってその効果を実感していている。それとともに、「すき」の対象についての思いを強めていくことができおり、適切な手立てが行われたということが分かる。

協働的な学びを通して、一人一人の自分の「すき」の自覚を促すという学びを創り上げるのは難しいが、このような自分や他者の「すき」にふれ合う学びを提供することで、自分の「すき」と他者の「すき」の違いや共通点に目が向き、他者も自分と同じように、「すき」なもの・ことをもっていて、それを自分と同じように楽しんだり、それによって癒されたりしている存在であるのだという質の高い気づきを得ることにつながっていく意味や価値のある単元であると考えられる。

おわりに

本実践は、公教育の中で行うキャリア教育において、キャリア発達段階に照らし合わせて一律に指導・支援を行うのではなく、本来求められている一人一人のキャリア発達を促すための取組が生活科のねらいを達成しながら行われており、大変意義深い取組であると考えられる。一人一人がもつ思いや願い、見方・考え方を大切にし、個別最適な学びを保障しつつ、協働的な学びにより、個々の学びをさらに質の高いものに誘うための教師の手立てが行われていた。生活科は、子どもの自立の基礎を養う教科であり、キャリア教育に果たす役割も大きいことも再認識できた。今後さらに、子どもたちの「自分の世界」を充実させていくための実践の在り方について、キャリア教育とも関連付けて研究を進めていきたい。

引用文献・参考文献

- 久野弘幸編著（2017）：『平成29年度版小学校 新学習指導要領ポイント整理生活』，東洋館出版社，p. 61.
- 志賀直美（2022）：「第1学年生活科学習指導案」，『令和4年度幼小中一貫教育実践研究発表会保育案・指導案集』，山口大学教育学部附属幼稚園・山口大学教育学部附属山口小学校・山口大学教育学部附属山口中学校，p. 39，p. 40，pp. 39-40.
- 新興出版社啓林館（2020）：『わくわく せいかつ 上』，pp. 108-117
- 寿山泰二（2012）：『社会人基礎力が身につくキャリアデザインブックー自己理解編』，金子書房，p. 9.
- 東京書籍（2020）：『どきどき わくわく あたらしい せいかつ上』，pp. 105-114
- 中央教育審議会（2011）：「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」，p. 16，p. 17，p. 19，p. 28，p. 32，https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afie1dfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf（2023. 7. 11 確認）
- 光村図書（2020）：『せいかつ [上] まいにち あたらしい』，pp. 124-135
- 三村隆男（2004）：『図解 はじめる小学校キャリア教育』，実業之日本社，p. 27.
- 文部省（1993）：『小学校 生活 指導資料 新しい学力観に立つ生活科の学習指導の創造』，東洋館出版社，前書き．
- 文部科学省（2011）：『小学校キャリア教育の手引き<改訂版>』，教育出版，p. 111，p. 127，p. 147.
- 文部科学省（2018）：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説生活編』，東洋館出版社，p. 8，p. 10，p. 11，pp. 10-11.
- 文部科学省（2023）：『小学校キャリア教育の手引き』，実業之日本社，p. 19，p. 20，p. 64，p. 94，pp. 94-95.
- 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター（2015）：『スタートカリキュラムスタートブック』，p. 2，pp. 6 - 7，https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/startcurriculum_mini.pdf?time=1423123582117（2023. 7. 11 確認）